

## ICT夢コンテスト 実践事例応募用紙

※この応募フォーマットはホームページよりダウンロードしてください。

類似のコンテストに入賞歴の無い事例が対象です。有無を右欄に記入ください。				無
この実践事例は下の要素の何々を含んでいますか。該当する項目の左に ● を記入してください。複数選択可です。				
● 効果的な授業	● 児童生徒の資質・能力向上	教員研修	ICT活用指導力向上	
校務の情報化	● 保護者や地域への情報発信	ICT環境整備	ICT活用サポート	
● ICT活用推進	学校運営・管理	保護者や地域による学校支援	地域での児童生徒学習支援	
学校行事	通級指導教室・特別支援学級	その他 ( 交流および共同学習 )		

学校又は団体名 (実践時)	宮崎県立日向ひまわり支援学校			
団体種 (校種、NPO 等)	特別支援学校			
応募者	代表者	飯干 知子	学習支援部長・研究主任	イイボシ トモコ
氏名漢字、職名、氏名カタカナ ※連名での応募も可	連名者			
学校や団体への所属年数(代表者)	10	年	ICT夢コンテストの今回を含む応募回数(代表者)	1 回目

実践事例タイトル (30文字以内・サブタイトル無し)	支援学校と工業高校のコラボ研究でJ Kの夢叶えますプロジェクト			
教科もしくは分野	交流および共同学習 番外編	教科の単元がわかる場合 (複数可)	自立活動	
対象者 (学年・他)	高等部2年生と高校3年生		専門教科 (電気科)	
実践場所 (PC 教室、体育館等)	学校	実践時期	H29. 7~H30. 12	
活用したICT機器、教材、環境等	電動台車、スイッチ	実践の特長 (先進性、普及性) をどちらか一つ選択 ※該当する項目の左に●を記入	<input checked="" type="checkbox"/> 先進性	<input type="checkbox"/> 普及性

**アンケートをお願いします。**

コンテスト企画運営の参考にさせていただきます。番号を「番号記入欄」に記入してください。複数記入可です。  
 (問) 本コンテストをどのようにお知りになりましたか。  
 (回答群) ①案内ポスター ②案内チラシ ③事務局メール ④新聞等のニュース媒体から ⑤前から知っている  
 ⑥教育委員会からの紹介 ⑦上司や友人・所属団体からの紹介 ⑧JAPET&CEC ホームページより

番号記入欄	①	②	⑤	⑥	⑦	⑧			
-------	---	---	---	---	---	---	--	--	--

※連絡先住所は、事務局からの郵送物を受け取る住所をご記述下さい。また、E-mail 及び電話番号は、事務局から連絡を取らせていただけるものをご記述下さい。

- ・ 1 頁目表紙 (応募者情報) のフォーマットの変更は、ご遠慮下さい。
- ・ 応募事例の図や写真データの組み込みは自由です。参照URLは不可です。
- ・ 表紙記述 1 頁と実践事例内容記述 2 頁以内、計 3 頁以内で纏めてください。それ以上は受け付けられません

## 実践の概要（実践内容を5行以内で簡潔にまとめる）

本校に通う知的障がいのある肢体不自由の高等部女子高生の夢「自分で進みたい」を叶えるために、日向工業高校電気科の生徒とともに電動台車を製作した。本生徒は、同じ高校生が自分のために製作してくれていることが日々の学習の意欲付けとなり、工業高校の生徒は、障がいの状態とその人のもつ能力を知ること、操作する手段や方法を工夫すれば可能性が広がることを学び、できなかったことができるようになることを実感した。障がいの理解はもちろんのこと、お互いの理解を促し、交流を深めるだけでなく、共生社会に向けた将来の担い手を育てる大切な機会にもなった。

### （1）ICT活用の目的とねらい

高等部に入学してきた座位保持車椅子を使用している女子高生。彼女は、首を縦横に動かして「はい」「いいえ」を伝えることができる。本生徒は、月に一度、宮崎県立こども療育センターの訓練へ出かける。そこで目にしたのは、彼女があごや頬を使ってスイッチを操作し移動する姿だった。（写真1）作業療法士や言語聴覚士とやりとりしながら嬉しそうに歓喜の声を発し進んでいく。自分の意思で、自分の操作で前に進んでいる姿は、本当に嬉しそうだった。そこで彼女の学習活動を見直し、この表情を



写真1 訓練の様子



写真2 初対面と説明

学校でも見たいと思い、交流相手校でもある日向工業高校に相談し、電気科の村田恒明教諭に協力を依頼した。生徒たちの同意が得られれば協力したいと返答いただいた。平成29年7月、日向工業高校の電気科3年生7名と初対面した。本校の女子高生を動画で紹介し、スイッチを使って自分で進みたい思いがあることを伝え、力を貸してほしいと彼らに伝えると快く引き受けてくれた。それから授業改善や製作に取り組む日々が始まった。

### （2）実践の特長・工夫（先進性があるか または普及性があるか）



写真3 観察と採寸



写真4 前後左右の概念

生徒の状態を知ることや障害を理解すること、普段の生活の中で見る車椅子と異なる座位保持車椅子の特徴、採寸から研究は始まった（写真3）。上部からスイッチを押す動作がなぜ困難なのか、どのようなスイッチなら彼女は操作しやすいのか、また療育センターとはどのような場所なのか、高校生は取組む

中で様々な疑問をもち、答えを求めた。彼らが課題研究として、毎週木曜日にこの取組を進めていくと同時に、本生徒も動機づけとなって意欲的に学習に取り組んだ。自立活動の時間では、行動の手がかりとなる概念である前後左右の学習を行うこと、自分の体の動きを理解し、円滑な上肢の動きで操作する方法を身につける活動を行った。各教科等では、電池で動く道具、家電品、タブレット端末など、スイッチを操作して主体的に活動できるよう学



写真4 学習環境の整備

習環境を整えた（写真4）。初めて対面したときは、まるで知っているかのように自然で温かい表情を見せてくれた工業高校生7人だった（写真5）。本人と対面してから工業高校生の意欲はより高まり「彼女のために成功したい」という気持ちが強くなった。特別支援学校と高校との交流および共同学習は実施されているが、ものづくりをとおして互いの理解を深め、互いにプラスになっていく取組としては先進性があるのではないだろうか。



写真5 女子生徒と対面



写真6 製作の様子①（平成29年度）



写真7 製作の様子②（平成30年度）

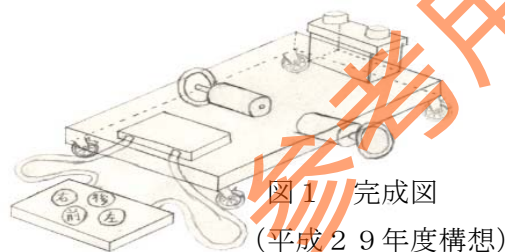


図1 完成図  
（平成29年度構想）

地域の福祉機器を取り扱う業者は、高校生のこの取組を知り、百万ほどする車椅子用の台車をデモ機として取り扱うようになり、ものづくりに取り組む高校生たちにも刺激を与えた1事例となった。彼らは卒業する前にこう伝えた。「最初不安だった。できるかどうか不安だった。でも様々な人たちののおかげでここまでできた。僕たちの

力が少しでも彼女の役に立てたなら嬉しい。みんなで協力してやってきて良かった。」と。

図1は、平成29年度のメンバーが描いた完成図である。翌年、後輩たちがその想いを形にするため、引き続きこのプロジェクトに取り組んだ（写真7）。

### （3）実践の成果（子どもたちや教員はどう変わったか、絆の深まりは見られたか等）



写真8 贈呈式の様子

平成30年12月に完成した電動台車の贈呈式が行われた。工業高校生は「今回の研究は、昨年度からの継続研究で理論は先輩達が研究してくれていた。私たちは、理論を実際の形にする作業がメインだった。多くの想定外のことが起こったが、ひとつひとつ解決しながらなんとか形になり完成させることができた。今回の研究を通して、日向ひまわり支援学校とのコラボレーションという素晴らしい体験もできた。私たちが持っている知識、技術が誰かの役に立つかも知れないと思うと嬉しい気持ちと誇らしい気持ちが湧いてきた。電気科だけでなく、機械科、建築科にも協力してもらい、日向工業高校の総力戦とも言える製作になった。日向ひまわり支援学校のみなさん、多くの

人たちの想いと技術が詰まった台車です。どうぞお使いください。」と堂々と胸を張って伝えた（写真8）。

この取組は、特別支援学校に在籍する女子高生と教師の想いを受け止めてくれた工業高校の生徒と先生の形である。互いの生徒たちの努力や理解のおかげで、本校職員のICT活用への理解はもちろんのこと、工業高校の職員の意識と理解が変化した。そして台車を使って2つのスイッチを操作しながら自信をもって進む彼女の成長の姿がここにある（写真9）。



写真9 移動の様子